



Title	第二部 部局史 . 体育指導センター
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1253-1257
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28215
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_1253.pdf



[Instructions for use](#)

体育指導センター

第一章 スポーツ・トレーニングセンターから体育指導センターへ

北海道の厳しい自然条件と社会的条件を考慮して、一九六〇年から「寒冷体育科学研究所」設置運動が地域の協力を得ながら行われていた。第一一回オリンピック冬季大会の札幌市開催決定に伴い、日本選手の強化のために「北海道大学スポーツ・トレーニングセンター」が一九六九年末に竣工、一九七〇年三月には運営費・一部設備費と管理運営について、北海道、北海道体育協会、札幌市、札幌市体育連盟の援助、協力を得て発足した。運営委員会は北海道大学、北海道体育協会、札幌市体育連盟の代表によって構成されたが、札幌オリンピック冬季大会（一九七二年）の終了とともに所期の使命を果たし、本学に移管された。

国立学校設置法施行規則の一部改正により、一九七二年五月一日付けで北海道大学と京都大学に体育指導センターが設置されることとなり、名称も「北海道大学体育指導センター」と改められて、体育の指導に関する専門的業務を行うことを目的とする厚生補導施設として再発足した。事務は学生部が担当する機構になった。同年六月十七日には、北海道大学体育指導センター規程、同運営委員会規程が制定された。初代所長には奈良岡健三教授が就任（併任）、同年八月十六日付けで専任教官として体育指導主事寄金義紀助教授が発令された。運営委員の構成は、センター所長、体育指導主事、保健体育科目担当教官二名以内、体育団体顧問教官二名以内、学生部長、事務局長であった。この体制が一九九五年まで続いたが、大学改革に伴い、学生部長、事務局長が抜け学務部長が入る変更があつて今日に至っている。歴代所長とその就任時期は次の通りである。奈良岡健三（一九七二年八月一日）、有岡勇（一九七三年四月一日）、宮崎兼光（一九七四年四月一日）、大宮快雄（一九七六年四月一日）、室木洋一（一九七七年五月一日）、東克彦（一九七八年十月一日）、斎藤勝政（一九八〇年四月二日）、中川功哉（一九八四年四

月二日)、室木洋一(一九八八年四月二日)、福地保馬(一九八九年四月一日)、井野智(一九九五年四月一日)、関口恭毅(一九九九年四月一日)。

第二章 トレーニングの指導

体育指導センター(以下、センター)の業務は、センター規程により(一)トレーニングの指導及びその研究に関する事、(二)体力診断及び運動能力の測定に関する事、(三)体育の指導のための講習会、研究会等の開催に関する事、(四)その他センターの目的達成に必要な業務とされ、これら業務の遂行に支障がない範囲で、センターを一般の体育のために利用させることができるとされている。

センターはトレーニング体育館(一〇二三平方メートル)と管理・合宿棟からなる。トレーニング設備としては発足時に移管された大型トレッドミル(一台)を中心に、逐次補充された重量式コンベクションマシン(一式)、油圧式コンベクションマシン(六台)、てこ式重量負荷マシン(六台)など、測定設備として、多目的生体現象監視記録システム・ポリグラフ(一式)、呼吸代謝測定装置(自動分析装置)(一式)、ビデオ式高速度カメラ(一式)などを有する。

トレーニング講習会の実施、学生団体のトレーニング・合宿訓練の計画・方法の指導、学生団体の体力測定の指導などを創設以来一貫して行ってきた。トレーニング講習会は体育団体の希望に対して体育指導主事が適宜行うほか、予算が得られれば外部講師を招聘して専門的トレーニング指導を行ってきた。トレーニング機器や測定機器の

利用説明・講習会も適宜行ってきた。

センターの利用者数の正確な把握は利用の利便性との兼ね合いで困難があるが、実態は増加し続けており、一九九九年度、利用時に自主的に記帳した者は一万四〇〇名弱である。授業時間帯の多様化、学生数、特に院生数の増加などには、定休日の廃止、開館時間の繰り上げ（午前一〇時から九時へ）、閉館時間の繰り下げ（午後八時から一〇時へ）など、開館時間を増加することで対応してきた。

スポーツ懇話会はトレーニングの専門的知識を普及するために、毎年スポーツ種目を選び、外部から専門家を講師として招聘して、学生・職員を対象に行ってきた。トレーニング講習会が実技指導であるのに対して、懇話会では概ね、様々なデータを利用して最新の研究成果の講演と質疑を行っている。

第三章 研究活動・社会貢献

体育指導主事の専門分野を中心にして活発に研究が行われ、特に近年は国内ばかりでなく、ドイツ、オーストリア、フィンランドの研究所（者）との共同研究も行っている。初代主事（寄金義紀助教授、一九七二年八月十六日～七六年七月一日）の五年間は、市民体力向上を目指した運動手法やトレーニング種目の開発が中心であった。第二代主事（見戸長治助教授、一九七六年七月十五日～八六年五月三十一日）の一年間は学内他部局（教育学部、工学部、医学部）や道内他大学の研究者との共同研究を推進し、体育科学研究の拠点としての力をつけた。

第三代主事（川初清典助教授、一九八七年四月一日～）の一九八七年以降は、高所トレーニング研究、ノルディッ

クスキー種目の運動生理学的研究・バイオメカニクス研究、スポーツリハビリテーション手法の開発研究などを行うとともに、全日本ノルディック複合スキーチームの競技力向上の一翼を担い、アルペールビル、リレハンメル、各オリンピック冬季大会の好成績を支えて今日に至っている。

センターは発足の経緯もあつて地域への貢献が強く期待され、発足の翌年（一九七三年）には最初の公開講座を実施、それ以降今日まで継続している。講座の規模は二〇〇三〇名とし、当初五年間はトレーニング体育館が市民に開放されていたこととの関連もあり市民の体力づくり講座を、その後十数年間はボートや水泳を中心に年一〜三回実施された。一九八九年以後、夏は「硬式テニス」、冬は「歩くスキー」を中心に実施したが、一九九六年からは冬の「歩くスキー」だけを開催している。これは自然観察も重視したユニークな内容であり、好評を博している。センターの公式報告書は一九八八年以降刊行され、特に、一九九二年度以降は『北海道大学体育指導センター年報』として定期的に公開されている。近年の主要な研究成果は「臨寒スポーツ科学資料」としてそこに公表されている。

第四章 さらなる発展の鼓動

専任者が体育指導主事一名という最小規模の厚生補導施設ではあるが、センターは発足以来二八年間、教育研究上の大きな役割を学内外に対して果たしてきた。近年は、少子高齢化・若年労働力不足、高度福祉社会の進展などの諸要因により、世界的に健康やスポーツに関する教育研究の重要性が高まっている。（執筆 関口恭毅）

